

## 童謡・唱歌の歴史とうた

兎 東 淑 美

### はじめに

日本の自然や情緒・抒情を生活に密着して歌っている童謡・唱歌は日本人の心を歌っているものである。時代は明治・大正・昭和から平成に変ったがうたはその時代を表わしているものでもある。昭和三十年代のある時期に童謡・唱歌は余り歌われない時があった。外国の曲や新しい曲を中心に歌い、それまでの童謡・唱歌は古いと思われ、その価値も一般の人々に評価されない時もあった。人々の曲の好みは時代の動きに非常に敏感である。

平成元年「日本のうた・ふるさとのうた」が募集され、全国実行委員会が組織された。全国から寄せられた五、〇〇〇曲の中から、各地域実行委員会・全国実行委員会が「日本のうた・ふるさとのうた一〇〇曲」を選定し数々のイベントを全国各地で行った。選定の折に寄せられた曲にまつわる思い出や感想は、六十五万通（六五七、三二一通）にもものぼった。

歴史の流れの中で童謡・唱歌のことは見ると何回もブームが起ったり去ったりという波を繰返しているが、平成元年の調査では日本人の心の中に童謡・唱歌が確かに大きく存在していることがわかる。それは目に見えないが或る時、静かに沸き出る心の泉のようにも思える。

現在童謡・唱歌を歌っているグループや団体は数多く、全国的にも静かなブームとなっている。全国組織では平成七年に群馬県前橋市県民文化会館において「第五回全国童謡・唱歌サミット&フェスティバル」が開催され全国から八十九（自治体四十三、民間四十六）団体五百五十一名が参加し盛大に行われた。又長野県でも平成七年四月に全県下の童謡・唱歌の団体やサークル、またこれから地域で会を作ろうとしている方々に声をかけて「長野県童謡・唱歌をうたう会」が発足した。平成七年十月には第一回大会、平成八年五月には長野市民会館において第二回大会を行った。上田小県地方でも平成三年より「上田童謡・唱歌を愛する会」を始めとして七地区で活発な活動があり平成八年で六年目を迎える。各地区の活動が活発であるから県大会、全国大会へと大きくなっている。

各地区の参加者の年齢層を見ると、五〇代〜七〇代の方が最も多く、とても懐かしく熱心に歌われている。又そこで歌われている方が一人暮の老人を訪問して一緒に歌い、喜ばれている例も数多い。

しかし一方において音楽好きの三〇代の人々の中には全くと言ってよい程、童謡・唱歌を知らない世代のあることも活動を通して知ることが出来た。特に童謡は世界に類を見ない日本の文化財である。ぜひ歌い継いでゆきたいと思う。

## 一 西洋音楽の輸入と唱歌と童謡の歴史

日本に最初に西洋音楽が入って来たのは、天文十八（一五四九）年のことであった。フランシスコ・ザビエルが伝えたキリスト教の賛美歌やミサ曲などの教会音楽であった。その後、幕末にペリーの艦隊が来航しアメリカの海軍の演奏が披露され、明治四（一八七一）年に初めて日本の海軍と陸軍に軍楽隊が設けられた。近代化をめざしていた明治政府は、さらに欧米と対等な交際をする為に社交場「鹿鳴館」を作り、市中音楽隊などの演奏によって舞踊会や演奏会を開いた。しかし一般庶民は直接西洋音楽を耳にする機会は少なかった。まれに市中音楽隊の演奏を街頭で聞かれるぐらいであった。明治五（一八七二）年の鉄道の開通式以後、次第に民間行事にブラス・バンドが進出し、江戸音楽しか知らなかった人々にメトリックなリズムや、勇壮な音楽器の響きを伝えたが一般の人々にとっては江戸の音楽が続く生活であった。その中でこのような音の響きは大半の人々にとっては明治末期まで特に好まれた音でなかった。

### (一) 唱歌について

「唱歌」という言葉は、明治政府が近代的な学校制度を作った時に、音楽教科につけた名称で英語の Singing の訳語として、日本に古来からあった雅楽用語「唱歌」しょうがから取ったものだと言われる。明治五年に出された「学制」の中で「楽器に合わせて歌曲を正しく歌い、徳性の涵養・情操の陶冶を目的」とする

小学校の教科書として唱歌は登場した。しかしそれまでの日本では国民的レベルで音楽教育がなかったことで、学制の中で音楽については「当分のヲ欠ク」という但し書きがつけられていた。一般社会ではキリスト教関係の学校や教会で教える賛美歌だけが唯一の洋楽との出会いであった。

明治政府は明治八年〜十一年まで愛知師範学校長の伊沢修二（長野県高遠出身）を、アメリカのブリッジ・ウォーター師範学校に留学させ近代教育を学ばせた。明治十二年文部省内に音楽取調掛が伊沢修二を長として発足し、彼の師であるアメリカ人メーソンを招いて洋楽が教育の面でも取り入れられた。その基本となったのは「日本音楽と西洋音楽を折衷して国樂を起すこと」であった。伊沢修二は西洋音楽の音階から「ファ」「シ」を抜いたものが雅楽の音楽に似ていると考えて、それに近いものを選んだ。中でもスコットランド民謡は、日本の雅楽や俗学のメロディーに似ていたので多く取り入れられた。当時の音階は「ヒフミヨイムナヒ」と読んだが、丁度ヨとナが抜けている音階だったので「ヨナ抜き音階」と言った。この音階が以後小学唱歌の特徴となった。

日本で最初の音楽の教科書はこうして出来、明治十四年音楽取調掛編著として「小学唱歌集・初編」を出版した。初期の曲は外国の曲に日本の歌詞をつけた、その中には後の「蛍の光」「蝶々」などがある。教科としての小学唱歌は明治二十年代半ばにかけて全国の小学校で実施された。しかし文語調の歌詞は小学生には難かしく、西洋音階は、それまで歌っていたわらべうたや、はやりうたとちがひ、子どもたちには歌いにくかった。内容も修身教育の色合が強かったので「唱歌校門を出ず」という状態が続いた。明治三十年代に入ると次々と民間の唱歌が出版された。その中には「汽笛一声新橋を」で始まる「地理教育鉄道

唱歌」「歴史唱歌」「航海唱歌」「世界唱歌」など地理や歴史に関する唱歌も出来た。

明治三十四年、東京音楽学校（明治二十年音楽取調掛が改称される）から「中学唱歌」が発行された。これは当時、東京音楽学校の教員や学生から懸賞募集形式で集めた三十八曲が載っている。その中には滝廉太郎の作品「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」が含まれる。又同年滝廉太郎編で「幼稚園唱歌」が出版され「お正月」「水あそび」など二〇曲が伴奏付で載っている。幼児の曲に伴奏の付いた初めてのものである。

一方文学界で明治十年代から言文一致運動が起っていたが、音楽の教育現場でもそれまでの文語体の歌詞から口語体の唱歌の必要が考えられ田村虎蔵を中心に、明治三十三年「幼年唱歌」「少年唱歌」が発行された。その中には「うさぎとかめ」「モモタロウ」など、おとぎ話を題材としたものが作られた。

明治四十年小学校令改正によって尋常科の唱歌が必須教科となる。日本人の作詞・作曲による曲で唱歌教育を行うべきだと、文部省みずから唱歌の編集にのり出した。

明治四十三年に出されたのが「尋常小学読本唱歌」で「紅葉」「ふじの山」「春が来た」「われは海の子」など日本人の手による新作であった。明治四十四年から大正三年までの四年間に「尋常小学唱歌」全六冊が刊行された。この教科書も他の教科書と同じように国定に準ずるものとして作られた。ここに発表された唱歌が文部省唱歌であり、昭和に入ると二十年間使われた。編集委員には、高野辰之、吉丸一昌、小山作之助、岡野貞一、佐々木信綱などがあった。すべて日本人による新作であったが、当時の方針で文部省唱歌という表記だけで作詞者、作曲者を公表しなかった。このことについては戦後昭和二十二年より明

記されるようになったが、すでに没していたり、あえて名乗りをあげない人もいたようで現在も作者不明の曲が多い。

しかし「尋常小学唱歌」全六冊が刊行される頃から次の時代へ向けて新しい胎動が始まっていた。

## (二) 童謡について

大正時代は「大正デモクラシー」といわれる自由主義・民主主義の思潮が花ひらいた時期である。子どもという存在に対する考え方も子どもとの立場に立つという方向に変わっていった。教育界では子どもの個性を自由に伸ばそうとする私立学校の登場や、見たままを描く自由画運動が起ってきた。そうした中で子どもの生活実感から離れた唱歌教育を批判し「もっと自由に豊かな、子どもの心に響く音楽を」と言う声が出はじめた。

その中心的存在となったのは夏目漱石門下の小説家、鈴木三重吉が主宰する児童雑誌「赤い鳥」の童話・童謡の文学的運動であった。「世間の小さな人々のために、芸術としての真価のある純麗な童話と童謡を創作する最初の運動を起こしたい」という趣旨で大正七年に雑誌「赤い鳥」が創刊された。唱歌の導入に際して排除されようとしたわらべうたに、ふたたび光を当たったのも「赤い鳥」を主張する童謡の運動であった。「赤い鳥」の童謡が曲譜つきで載せられるようになったのは大正八年（一九一九）年五月号「かなりや」の曲からであった。

鈴木三重吉は多くの作詞家、作曲家に働きかけ、そこで賛同を得て沢山の名曲が生れた。童謡の初期に

は北原白秋、泉鏡花、三木露風、西條八十、小川未明などが詩を発表し、成田為三、広田龍太郎などが曲をつけた。又童話は島崎藤村、芥川龍之助、有島武郎、小川未明など一流のメンバーであった。

三重吉らの運動に刺激されて大正八（一九一九）年には「金の船」「おとぎの世界」「こども雑誌」「童話」「コドモノクニ」などの児童雑誌がつきつきと出版され、その数は十三誌にものぼった。

外国ではこのような運動をどう評価したかについて、金田一春彦著「童謡・唱歌の世界」の中で、……アメリカで日本の童謡「赤い靴」「青い目の人形」などを聴いたセナター・ビルスという教育学者が次のような意見を述べている。「日本では今一流の詩人がわざわざ子どもたちに与える詩を競作し、一流の音楽家たちが競ってそれを作曲して、子どもたちに聞かせ歌わせている。このようなことが今まで世界の先進国を以って自任している、欧米の諸国にあつたであろうか。これは世界の児童文化史上ゆゆしきことと述べている。

今日でこそ世界のあちこちで子どもの為の音楽コンテストがあり、多くの新曲も生れているが、当時は外国のどの国にも日本のような動きはなかった。大正期の童謡は子どもばかりでなく大人にまで流行し、まさに童謡の黄金時代が展開された。童謡は日本が世界に誇る文化財である由縁である。

作詞の面で北原白秋は子どもたちの生活感情とあつた歌を作るべきだと考え、新しい童謡の基本は在来の日本の童謡「わらべうた」に根本を置くべきだと考えた。一方西條八十は白秋とはちがう意見を持っていて、子どもには詩の内容は理解されなくても、その響きだけが彼らに伝われば十分であると考えていた。日本的情緒の高い詩を作った、野口雨情は故郷茨城の風土に根ざした叙情性をもっていた。「十五夜お月さ

ん」「七つの子」など実際に子どもに歌われたうたが多い。彼らの他に三木露風「赤とんぼ」清水かつら「靴が鳴る」中村雨紅「夕焼小焼」など作風のちがう人々が活躍したことにより大正期の童謡は作品の幅も広がり豊かになり多くの人々に愛された。

作曲の面では、音楽学校を卒業して西洋音楽を取り入れた山田耕筰は「この道」「からたちの花」など大人が子どもに歌って聞かせる芸術性の高い曲を作曲「赤い鳥」に発表した。

一方「金の船」などを中心に活躍した本居長世や中山晋平の曲は、どれも庶民的で地方の人々にも受け入れやすい旋律で書かれていた。「十五夜お月さん」「あの町この町」など数多い曲がある。

童謡の普及について本居長世は娘を伴って全国をまわり自分の童謡を広めた。中山晋平も何人もの童謡歌手を育てている。

その後童謡は昭和に入ると、外国資本の導入でレコード会社が生まれ、レコードの大量生産が始まり、レコードに吹き込まれたうたがラジオによって各家庭に放送された。放送は文字として知られていた大正の童謡を音楽として定着させた重要な役割をした。放送とレコードは共に栄えた。

昭和十二（一九三七）年に始まった日中戦争前後から政府は音楽に対する統制を強めた。音楽は国民をふるいたたせ、敵愾心を高め戦争への士気を強めるための道具として政府は使った。つまり軍需品であった。外国の歌も禁止され、ドレミファソラシドの階名唱もイタリア語であることから定着したものを日本音名による唱法に変えられた。「日の丸の旗」も「へへトイトイト イイハハニニハ ニニハハイヘトハ



ハイヘトイヘ」となった。教科書に取り入れられた歌も「広瀬中佐」といった死を賛美し忠君愛国の精神を歌ったものが多かった。盛んに歌われた少国民向けのうた、「お山の杉の子」「兵隊さんの汽車」（後に「汽車ポッポ」と改題）は現在歌われている曲であるが、当時の曲は終戦と共に歌われなくなった。

戦後、家を焼出され食糧のとぼしい辛い日々を送る人々を励まそうと「だれもがうたえるホームソング」を目指したNHKの番組「ラジオ歌謡」が昭和二十一年に始まった。「朝はどこから」「山小舎の灯」など人々の心をなぐさめ、励ましたのはうたであった。

昭和二十二年レコード童謡の製作を再開したレコード会社から、専属の童謡歌手が誕生した。童謡歌手はマスコミの発達で少女雑誌の表紙のグラビアを飾り、子どもの憧れの的になった。しかしその行き過ぎにより、PTAなどの批判を受けて昭和三十年代半ばよりしだいに姿を消していった。

一方昭和二十四年NHKラジオ番組「うたのおばさん」が開始された。この時期、一流の作詞家、作曲によって名曲が生れている。新しい時代にふさわしいうたを作ろうという意欲的な動きが詩人のサトウハチローや佐藤義美たちから起り、反映されていたのであった。作詞にはサトウハチロー、小林純一、佐藤義美、まど・みちおなど「赤い鳥」童謡につながる人々。作曲は中田喜直、芥川也寸志、團伊玖磨などクラシックの一流のメンバーが起用され「ぶらんこ」「かわいいかくれんぼ」「とんとんともだち」「どうさん」「めだかの学校」など、芸術的に洗練されながら、子どもの生活感情を素直にうたいあげた曲を発

表し、戦後の子どものうたに新しい流れを展開して行った。

戦前まで道徳的効果ばかりが求められていた音楽教育も、純粹な心の喜びを味わうための芸術教育として新しく生れ変わった。昭和二十二年に文部省が作った音楽の教科書には戦時中厳禁であった外国の曲が入れられた。フォスターなどのアメリカの曲や外国民謡などであった。

昭和二十八(一九五三)年にテレビ放送が開始され幼児番組からは「おもちゃのチャチャチャ」「とんできたバナナ」などリズムカルでポップス感覚の溢れた曲が流れるようになった。

昭和三十六(一九一六)年からはNHK「みんなのうた」が始まり「山口さんちのツトム君」などが喜ばれて歌われた。

## 二 平成元年調査「日本のうた・ふるさとのうた一〇〇曲」より

一〇〇曲中ベスト一〇に選ばれている曲で一番は「赤とんぼ」二番「故郷」三番「夕焼小焼」四番「朧月夜」五番「月の砂漠」六番「みかんの花咲く丘」七番「荒城の月」八番「七つの子」九番「春の小川」十番「浜辺の歌」である。

そのうち三曲は高之辰之作詞・岡野貞一作曲で「故郷」「朧月夜」「春の小川」である。

いかにこの二人のコンビは素晴らしいかわかる。永い年月を経て人々に歌い継がれているが高野辰之は長野県豊田村の出身で現在も立派なお宅がある。鋭い観察力を持ち大変な勉強をされたがどんな人とも親し

く楽しく会話をされたという豪放磊落な人柄だったようである。一方岡野貞一は鳥取の出身でクリスチャンであり、終生教会の礼拝の奏楽をされたという。異った二人であったが作品は日本の名曲となった。その他「夕焼け小焼」「みかんの花咲く丘」の二曲も長野県出身の草川信・海沼実の作曲による曲であり、前述の三曲に合わせると五曲が長野県の出身の作品である。

(一)一〇〇曲中に多く選ばれている作詞家について

北原白秋 八曲(この道、砂山、からたちの花、ペチカ、待ぼうけ、アメフリ、城ヶ島の雨、揺籠のうた)

野口雨情 八曲(七つの子、赤い靴、青い目の人形、十五夜お月さん、あの町この町、しゃぼん玉、雨降りお月、波浮の港)

高野辰之 五曲(春が来た、春の小川、紅葉、故郷、朧月夜)

サトウハチロー 三曲(ちいさい秋みつけた、うれしいひな祭り、お山の杉の子補作)

(二)一〇〇曲中に多く選ばれている作曲家について

中山晋平 九曲(砂山、しゃぼん玉、雨降りお月、背くらべ、あの町この町、アメフリ、鞠と殿さま、

波浮の港、てるてる坊主)

山田耕筰 八曲(赤とんぼ、この道、砂山、からたちの花、待ぼうけ、中国地方の子守歌、ペチカ、荒

## 城の月編曲)

- 岡野貞一 六曲(故郷、朧月夜、春の小川、紅葉、春が来た、桃太郎)  
 本居長世 五曲(七つの子、赤い靴、青い目の人形、通りやんせ、十五夜お月さん)  
 滝廉太郎 四曲(荒城の月、花、箱根八里、お正月)  
 弘田龍太郎 四曲(叱られて、浜千鳥、靴が鳴る、春よ来い)  
 中田喜直 四曲(夏の思い出、小さい秋みつけた、めだかの学校、雪の降る街を)  
 海沼実 三曲(みかんの花咲く丘、里の秋、お猿のかごや)  
 草川信 二曲(夕焼小焼、揺籠のうた)

作曲者には中山晋平、海沼実、草川信が長野県出身者で選ばれている。

作品が多く選ばれている作曲家は中山晋平で九曲である。民謡やわらべうたのリズムにヨナ抜き音階を使い庶民的で愛される曲を作曲している。次に多いのが山田耕筰の八曲である。ドイツに留学し西洋音楽を学び美しいハーモニーによる、西洋風で格調の高い曲を作曲している。

中でも「砂山」は北原白秋の詞に二人が作曲をしているが、中山晋平の作品は日本風であり、山田耕筰の作品は西洋風で対照的な曲である。色々な会でこの曲を歌ってから曲の好みを聞くと、多くの場合半分ずつに分かれる。両方の好みがあることがよくわかる例の曲である。

おわりに

「童謡・唱歌」は明治・大正・昭和・平成という歴史の中で幾多の経験を経て歌われてきた、戦争・貧困・不況・豊かさ・孤独・などの中で生活と共にあつたうたは、嬉しい時・悲しい時・淋しい時、人々を励まし慰めさせている。現在も「童謡・唱歌」は人々の心の中に確実に存在している。

情報の発達により世界の国々の様子が、その日のうちに知らされる時代であり国際化も進み、音楽も多様化している。

一方高齢化社会が進む中で身心の健康がより重要になってゆく。音楽・特に童謡・唱歌は大切な役割を果たしている心の薬のように思う。色々な活動を通して高齢者の方が明るく目を輝かせて歌う姿はそれを物語っている。

このように世代も周囲の環境も大きく変つてゆく中で、日本の自然や郷土・情緒や抒情を歌っている「童謡・唱歌」を次の世代へぜひ歌い継いでゆきたい。そして新しい童謡についても歌つてゆきたいと思う。

#### 参考文献

NHK「日本のうた ふるさとのうた100曲」

編集「日本のうた ふるさとのうた」全国実行委員会（一九九一）

創る

編集 講談社

発行所 株式会社 講談社

発行者 野間佐和子

十五夜お月さん

—本居長世・人と作品—

著作者 金田一春彦（一九八四）

発行所 株式会社 三省堂